

ドイツ革命の敗北とローザ

八木 沢 二 郎

(1) はじめに

我々が一九一八年のドイツ革命の敗北を取上げ、ローザを新たにため取上げようとする意図は、もちろん、レーニン、トロツキ、(そして当時はスターリンをよくめて)が「ドイツ革命にかける」ことによつておくれたロシアがドイツ革命を突破口とする世界革命によつてはじめて社会主義への方向を取ることができるとした意図がくづれ、かかるドイツ革命の敗退を契機として一國の社会主義が正当化されスターリンが勝利していつた過程をたどり、その事がその後のコミンテルンを通じる全共産主義運動に影響を与えたという点で、まさに世界的な出来事であるからである。

影響という点からも検討されねばならないが、それ以後の革命の失敗(中国とキューバを除く)―特に社会主義の基礎となるべき高麗資本主義に於ける―が単にかゝるスターリニズムの影響だけで説明出来ない以上、ドイツ革命の中から、いわば現代革命の法則とも置うべきものを抽出することが必要であると思われる。問題を単にスターリニズムの影響(それは確かに、ヒトラーとの斗争に於けるドイツに於いて、フランス、スペインの人民戦線に於いて、戦後の革命情勢に於いて決定的役割をはたした)という点にのみしぼることは、問題の過程と結論とを混同し、一種の「裏切り史観」に導びかれ、かつてのブントがそうであつたようにスターリニズムからの分離、弾がいに終つてしまつてあろう。

ここでは、むしろ、視野を先に述べたスターリニズムとの関係といった点は一応捨棄して、いわゆる高麗資本主義に於ける革命の形態という点からドイツ革命へアプローチする。その事は現在、高麗資本主義に於ける革命として提起されている構造改革路線に対する間接的な批判となるであらう。

今述べたように、ドイツ革命の敗北は、その後の共産主義運動をスターリニズムに導す事となつた客観的な条件の主要な内容をなしており、それ故ドイツ革命のロシアコミンテルンに与えた

ドイツ革命の開始は一九一八年十月二十九日シリツヒ埠頭での水兵の反乱、そして一月三、四日のキール軍港に於ける水兵の反乱を合図として全ドイツに拡大していつた。そしてこのような労働者階級の激しい斗争、革命的情勢は全国に於ける不均等な発展

「戦士」NO 4 (一九六四年)

テンポにもかゝらず、一九一九年四月のミュンヘンに於ける協
議会(レーテ)独裁とその徹底的な抑圧、破産(五月一日)まで
続いたのみならず、二二年、二三年にも革命的情勢が訪ずれ、そ
れが主として、アメリカ資本の援けをかりて相対的安定にいたる
のは二四年以降にすぎない。そしてこの間のドイツ革命の流弊に
現われた諸特徴は、この相対的安定期を破つた二九年恐慌以降の
ヒットラーの登場とファシズムに対するドイツプロレタリアートの
の完全な敗北にいたる階級斗争に一貫した連続性をもつて貫徹し
ている。

かかるドイツ革命の連続性は例えば「極左派の運動が極右派の
反撃を強化し、極右派の反撃がいよいよ極左派を反動に駆りたて
るといふドイツ革命 反革命の悪循環はこのようにして、ファシ
ズムの勝利までつづくのである」(猪木正道「ドイツ共産党史」
二二二頁)という形でも確認されている。

確かに、一九一九年のドイツ革命に現われたスバルタクス、プ
ンド(ローザ・リブクネヒト)、独立社会民主党左派(革命前
オプロイテ)、これに敵対するルンペン・プロレタリアートや没
落してゆく小ブルジョアを組織したフライコール(義勇軍)の激
進的軍事斗争、そしてこの両方の中で、基幹部分の労働者階級
の支持のもとに存在し、支配的地位にある社会民主党というタイ
プは、一九二九年以降ドイツ共産党とナチスが失業者を二分し、
それそれの突撃隊による軍事的打倒の由で先づドイツ共産党がか
たづけられ、その後両者に対する中立的立場を持して勢がなか
つた基幹労働者組織労働者 社会民主党が一戦もまじえること

なく敗北していつた過程とピツタリと対応している。ただ前者に
於いて、フライコールの指揮者は社会民主党のノメケであり、そ
してともかくもその後のドイツ帝国主義の復活による安定によつ
て破産はフライコールによつて死へ追いやられることなく、逆に、
それを解体し、しばらくはブレンツァーグループ(シュトゥルム
タール「ヨーロッパ労働運動の悲劇」)として存在を許されてい
た。逆に後者においては、ヒットラーに引きいられた無法者たち
は、自己を金融資本の最も狂暴な代理人とすることによつて独共
産党はもとより、ブレンツァーグループとしての労働組合 社会
民主党の存在をも否認し、ファシズムの勝利を確立したという相
違があるにすぎない。

だが、このファシズムの勝利は、その後の国際共産主義運動に
根本的な転換を迫つた。人民戦線戦術の提起がそれである。それ
は、先ず、仏共産党の転換に端を発し、一九三五年のコミンテル
ン七回大会に於いて自然発生的に開始されたこの転換を承認する
という形でなされた。この流れは現在イタリア共産党によつて代
表される階級改革路線として体系化されている。そして彼等の問
題意識は「労働者の統一」(ウイトリオ著、合同出版)という点
にしばられている。

確かに労働者の統一がファシズムの勝利が労働者内部の分裂に
打倒によつてはじめてなされた以上決定的な問題として登場した
事はまづたく当然の事であつた。だが、問題はこの統一がどのよ
うなヘゲモニーによつてなされるかという点にこそ存在している。
そして我々と階級改革とは、この解決の方向によつてきつぱりと

分離されている。すなわち、人民戦線一構造改革は、結局、労働
者の統一の名によつて戦闘部分の犠牲に於いて基幹部分(上層
労働者)、都市中間層のヘゲモニーのもとに、人民戦線政府を支
持した。そしてテイミトロフの七回大会での報告(「反ファシヨ
統一戦線」国民文庫)でも明らかになように、この人民戦線は、戦
術として操起され、それと別個にプロレタリア独裁への準備を行
わねばならないとされているが、この関連は不明瞭であり結局、
実践的には、戦闘の方に重みのあつた事はまことに当然であり、
そこからして戦線は反ファシヨ、民主主義、社会主義革命という
連続性が追求されるのであるが、そのヘゲモニーの問題が変化し
ないならば、それは無意味である。

だが、もちろん、我々は労働者の統一がスバルタクスやドイツ
共産党の基盤となつた失業者軍や、急進的小ブルのもとになされ
ると考えているわけではない。そのような道はすでに人民戦線が、
いかに強弁しようとも民主主義一社会主義へと転化し得ず敗退し
たと同じように歴史は先散する事を教えているのである。

このような二つのコースが失敗したとするならば、どのような
ヘゲモニーによつてどのような形態によつて労働者の統一はなさ
れるかという問題は現代革命にとつてきわめて重要な問題だと思わ
れるのである。革命が、全労働者の事業であるとするならば、確
かに基幹部分の労働者(それは、ほぼ組織労働者と同じだが)こ
そ、その主たる荷手であることは自明の理である。にもかかわ
らず一九一九年のドイツ革命で、スバルタクスは、この部分に影
響力を保持することきわめて弱く、影響を拡大した時は、好機を

いつしていた。(三月ゼネストの失敗)、二九年以降のファシズ
ムとの年事に於いても組織労働者は、ついに社民から離れること
なく、一戦も交えずに敗北した。かかる事実にもかかわらず、こ
の部分に革命に起上りブルジョアジーをふみ倒すであらうことは
何の疑いもない。ただ、そのために、ある客観的条件と、主観
的な準備が必要であるというにすぎない。

それは何か？
更に、我々のかかる問題意識は、以然として安保斗争に於ける二
つのコースのイメージがくつきりと脳裏にこびりついている事に
よつていられる。即ち、

安保斗争に於ける、五・一九以降の民主主義擁護斗争に市民主
義、国会解散一総選挙の要求と、それに対するフロント 全学連の
安保紛争一岸内閣打倒のラジカルな斗争の対抗 相互浸透に表現
された二つの道を、どのように止揚するかという点である。日本
の政治斗争は、このように安保斗争に現われた二つのコースだけ
ではなく、すでに、速く自由民権運動に於いても、そして明治三
十年代から幸徳事件にいたる過程でも、大正デモクラシーから大
杉のアナルコサンジャリズムの時代にも一貫としてこの対抗関係
は存在していたのである。この事は、確かに、日本資本主義固有
の二重階級に根源を持つと同時に一方で高度資本主義圏に於いて
現われる労働者階級の分裂という一般性、共通性の特殊日本的形
態であるという点に於いて、我々はいかに分岐を止揚する条件に
も、共通項が存在していると考えるのである。事実、安保一三池
に於ける市民主義 民主主義擁護斗争は、基幹労働者の利益を迫

求する民衆運動のもとにあつたのだし、他方、三井三池とブンド
I全労連は、独占資本と同時に、かかる基幹労働者の利益を目ざ
す組合運動との二重の疎外の中でその抑圧をはねかえそうとする
部分の根源的なエネルギーを解放しようとするものであつた点で
先に述べたドイツ革命との共通性を有しているのである。

以上のように、我々が、ドイツ革命を取上げようとするのは、
それが現代革命におけるある共通性を保持した一典型的な革命で
あると考えるからである。実に、ドイツ革命の流産とローザ・ル
クセンブルグの死は、現代革命の悲劇の序曲である。

(2) 一九一八年ドイツ革命

以上の事を前向きにして、ドイツ革命を具体的に検討すること
にしよう。

④ 薩原一氏は、その「ドイツ革命史序説」に於いて、ローザ
の死をもつて終る一月斗争以降の大衆の革命的エネルギーを
高く評価し、一月斗争以降をもふくめてドイツ革命の「放散」
を明確にしなければならぬとされる。この評価は、ともか
くとして、我々の問題意識からするならば、さしあたって一
月斗争まで、すでにドイツ革命敗北の原理は見取れると
いう点で、一月斗争までを検討する。

の社会主義者のもつとも議論の与地のない、もつとも基本的な義
務、すなわち、革命的情勢が現在あることを大衆に明らかにし、
その情勢の広さと深さを説明し、プロレタリアートの革命的自覚
と革命的決意を呼びさまし、プロレタリアートをたすけて革命的
行動にうつらせ、こういう方向にむかつて活動するために革命的
情勢に応ずる組織をつくりだすという義務である」(同、二一
頁)

そして、やがてかかる革命的情勢の到来した事は誰の目にも明
白となり、「敵は国内にある」(リープクネクト)ことが気づか
れはじめた。

ドイツに於ては、特に一五、一六年にかけての冬期の食糧不足
は深刻化し、大衆の不満は増大し、それに共なつて、先づ、SP
D代議士会から分裂が生じた。すでに八月四日の軍事予算以降何
回かの戦事予算の国会呈上に対し、除々に反対派が増加し、つい
に一六年三月二四日の緊急予算案をめぐつて社会愛国主義者と社
会平和主義者が分裂し、後者は、やがて独立社会民主党(USPD)
を結成した。更に増大する大衆の不満と不利な戦況の中でSP
Dも又、他のブルジョア政党と共同し「話し合いによる平和」
をめざし帝國議事に和平決議案を成立せしめるにいたつた。(一
七年七月)

このような上方の動きと別に、大衆運動も革命的オプロイテの
指導下に成長しはじめた。この革命的オプロイテはベルリン金屬
労働組合の左翼反対派によつて一六年に結成されたが、彼等は最
初意識的には社会平和主義者としてUSPDに参加していた。し

一九一四年八月四日は、オニインターナショナルの崩壊の日で
あつた。いまや、日和見主義は、社会振外主義に転化し防衛戦争
を云々しはじめ、この日の帝國議會で、ドイツ社会民主党(以下
SPD)は、軍事予算に賛成するにいたつた。SPDは、エンゲ
ルスさえ引き合いに出して「絶対主義に対する防衛戦を合理化
した。」

周知のように、大破産、オニインターは、何となく帝國主義
戦争に対する斗争を宣言していた。例えば、一九〇七年のシユツ
トガルド大会では、ローザ、レーニン、マルトフの共同提案にか
かる次のような宣言を承認している。「万一、右のような(反戦
の種々の斗争筆者)努力にもかかわらず、戦争が勃発した時は、
労働者階級は戦争を速かに終了せしめるために努力し、かつ全力
を挙げて、戦争によつて惹起された経済的および政治的危機を國
民各層の政治的攪乱に利用し、かつ資本主義的階級支配の覆滅を
促進すべき義務を負う」

社会排外主義に転向した部分の云い分は、かかる社会的危機は
存在していないという点にもあつた。これに対してレーニンは「
オニインターナショナルの崩壊」で、オニインターの破産を宣言す
ると共に、これに反論した。かかる危機は「疑いもなくやつて来
た」(レーニン全集二一、二九九頁)そしてこの情勢を革命に導
びさうるか否か「それは我々は知らないし、誰も知ることはでき
ない。経験だけが、先進的階級であるプロレタリアートの革命的
気分が発展し、革命的行動にうつつていくことだけがそれを示す
であろう」(同二二頁)「いま問題になつているのは、すべて

かしUSPD国会議員団が、平和をとなえるのみで城内平和を打
破ることのないのに対し、オプロイテは平和のために、スト、デ
モ等の実力にうつたえねばならないとする点で決定的に異なつて
おり、それ故、彼等は、斗争を通じて左翼化してゆくのである。
ともあれ彼等の指導下に先づ、一六年六月才一回目の政治ストが
執行され、ベルリンの労働者五万五千人が参加した。更に一七年
四月才一回、一八年一月に才三回目と斗争は拡大し、この一月の
斗争にはベルリンで五十才の労働者が参加しただけでなく全国
の主要な都市に広まつてゆき全ドイツで百万の参加があつたの
である。この一月の斗争は軍隊の弾圧によつて一応は終息したが、
ドイツ軍が三月から開始した春季攻势に失敗し、やがてオースト
リア、ブルガリアの降服と続く中で、ついに、この軍隊内部にさ
え厭戦気分が充満するにいたつたのである。かくて、ドイツ参謀
本部は、九月和平交渉とその前提としての民主化を決議するまで
にいたり、十月にはマックス公を首班としてSPDのジャイデマ
ンをふくめて軍史上の議合責任体制内閣が登壇し、そのもとに下
から盛り上り成長しつつある、平和と國內改革の要求を上からの
ヘデモニーで去勢しようとする策動が本格化するにいたつた。だ
が、彼等がカイゼルの退位問題でもたつく間に、下からの大衆の
斗争は、一月三日のキール軍港の水兵の反乱に端を発し一挙に
全国的に拡大し成長していった。

ベルリンに於いても、一月九日、ほとんど自然発生的に大衆
は街頭におふれ出て、かくてSPDのジャイデマンは、上からの
策動のおくれをとりもどし大衆のエネルギーを去勢するために、

独断でもつて、国会のバルコニーから共和国の成立を大衆の前に宣言したのである。

この一月九日の後、革命のコースを象徴する二つの機関が設置された。一つは、内閣 人民委員協議会であり、これはSPD、USPD各三名づつ六名によつて構成されエーベルトが首班になつた。一方、大衆は九日街頭へ出たが、革命的オプロイテは、彼等に対し翌十日ブツシュ曲馬館に於いて労兵協議会(レーテ)を開催する事を提案し、十日、労働者四名につき一人、兵士一個大隊につき一人の制で選出された代表、三千名によつてレーテは開催された。だが、このレーテは、スバルタクスやオプロイテの干渉に反し、社会民主党の支持が圧倒的多数をしめたために執行協議会を独占しようとするオプロイテの意図は坐折し、オプロイテ、SPD各七名、兵士代表一四名、計二十八名の構成となり、しかも兵士代表はおおむねSPD支持であつたからオプロイテは少数派であつた。

しかし、この十月の段階では、レーテこそ人民を代表するものであり人民委員協議会はそのもとに行政を担当するものとされてきた点で、革命の盛り上がりを知る事ができる。そして又、ロシア革命に於いても当初、ボリシエウイキはソヴェト内の少数派であつたからこの事は、革命の進展状況の当然の帰結であり「ドイツ革命のこのありさまは、ドイツ国内の諸関係の進展の度合に、そのまま見あつている」(ローザ選集四、六二頁)のであつた。

このようにして成立した人民委員協議会とレーテの二重権力状況は、このドイツ革命の進路を示すバロメーターであつた。この

二月革命以後変化し、七一年のバリ・コムニオン、一九〇五年のオ一次ロシア革命を過渡期として、このドイツのレーテ、イタリアの工場委員会等によつてはじめて高度資本主義圏に於ける自己権力の原型が表現されたものと思う。

イギリスのビュリタン革命に於けるクローンウエル軍は、周知のように、その主力をヨーマンによつて構成されていた。それは、まったく当時の歴史の発展段階に照応している。このヨーマンは、すでに一四世紀末には農奴から解放され、分利地農民となつていたが更に、革命期の一七世紀にはマニユファクチュアブルジョアジーへ転化する部分とプロレタリアへ転落する部分とに階層分化が進行しつつあつた。かくてビュリタン革命は、このマニユファクチュアブルジョアジーの指導のもとに広範な農民の同盟によつて達成された。ブルジョア革命は、それが、いまだ農民層の分化をふくまぬ限り成立しない。絶対主義は、小營業の段階にいたつて成立、発展するが、ブルジョア革命は、すでにかかる小營業の分化によつてマニユファクチュアブルジョアジーの転化、成長によつて彼等の指導のもとに、はじめて成立するのである。だから必然的にこの革命の主体の内部には、分裂を内包しており、プロレタリアに転落する部分は、革命の過程でその指導者を突き上げ先へ先へといそがせ、指導者の意図をこえて激発するが、彼等の(二歴史的)未成熟によつて自己を象徴することができず、指導者の裏切りに争うのである。イギリスでは、クローンウエルの水平派に対する裏切りとして、フランスではジャコパンの敗北として現われる。そしてクローンウエルはロツクによつて理論化され、水平派一

対抗関係、同じことだが、レーテ内部に於いて「少数派派である事を卒直に認めた所から出発して多数獲得へ」(レーニン四月テーゼ、全集二四)という方向に於いてのみドイツ革命の進む方向はあつた。そして、オプロイテもスバルタクスも、この方向へ進んでいった。だが、彼等は、ある時に、しゅんじゅんしてテンポにおくれ、ある時は、時期尚早の決戦に打つて出ることによつて粉砕された。その中で、ローザのみが、冷静に革命の進展を見守り、最も正しい方針を提起していた。だが、彼女の依拠する部隊は、その方針を認めなかつた。それは革命の発生した段階での技術的手段ではいかんともしがたい力であつた。問題は、この革命にいたるまでの全過程に於けるローザの理論と実践にかかつている。レーニンは、「おそすぎた分離」と書いた。だが、それは結論である。

しかし、このローザ理論の検討は、いましばらく後にまわさねばならない。

(3) ドイツ革命の産物「レーテ」とは何か？

ところで、このレーテとは何であるか。すでに前号竹野論文「イタリアとジャコパン」で明らかのように、これこそ現代に於ける唯一の労働者の自己権力である。この自己権力の萌芽はすでにブルジョア革命の段階で見取れる事ができる。だが、私の考えでは、このブルジョア革命に於ける自己権力は、一八四八年の

ジャコパンはルソの永久革命によつて、その思想的代弁者を見出す。だから、この水平派ジャコパンは、まさにプロレタリア化された農民、プロレタリアートの萌芽であるだけにプロレタリア革命へ無限に接近しているが、まだそれに質的に飛躍してはいない。転化するためには、自己を市民から区別しなければならぬ。そして、それは一八四八年の二月革命の課題であつた。ともあれブルジョア革命では、大衆の自己権力とは市民軍として現われている。フランス革命では一方進んでバリの区を基盤としてコムニオンがジャコパンの指導下に結成されている。四八年の六月事件によつて、プロレタリアートは自己を市民から区別し、敵の団結を一方強固にすることによつて自己の敵を明らかにしたが、その形態は、フランス革命とかわつていない。クローンウエル、ジャコパンの段階では、いわば、ブルジョア化した農民と、プロレタリア化した農民との指導、同盟、対立への発展であつたが、この六月事件では明確にプロレタリアートは、ブルジョアと敵対した点に歴史の進展を見取れる事ができるのである。

この斗争は、マルクス、エンゲルスに対して質的な変化をもたらした。従来の急進民主主義の残りを取り去り、永久革命を放棄したのである。マルクスは、すでに「ヘーゲル法哲学批判序説」に於いて、はじめてプロレタリアートのヘゲモニーを確認していた。それはまさにドイツ革命に当面して、すでにドイツブルジョアジーにその革命のエネルギーの存在してないことの確認を通じて、ドイツ革命の荷斗としてプロレタリアートを「発見」したのであつた。それは無限にプロレタリア革命に近似しつつそれに転化し

得ないルノーの永久革命論を転化した形態に外ならない。

だが、マルクス、エンゲルスは、二月革命の総括を通じて、この立場を放棄した。「フランスに於ける階級斗争」へのエンゲルスの序文は、その事を物語っている。「歴史は、われわれおよびわれわれと同じように考えたすべての人々が間違っていることをあきらかにした。当時はまだ大陸における経済的發展は、資本主義的生産を阻止しうるほどに成熟した段階には、とうてい達していなかったのだ。歴史はこのことを一八四八年以来大陸の全土を捲きこんだ経済革命によつて、証明してみせた。フランス、オーストリア、ハンガリー、ポーランドに、また最近ではロシアに、大工業をはじめて根づかせ、そしてドイツをまさしく第一級の工業国に仕上げた経済革命—この革命の全体は、資本主義の基礎の土で、おこなわれた。したがつてその基礎は一八四八年にはまだ、大いに伸びる力を持つていたのだ」そこから、必然的に、プロレタリアの独自性二組織の問題が提起されねばならなかつた。ただし、永久革命論のように、いわば自然成長的に発露する革命の中で、ブルジョアを追い立て、小ブルジョアを突き上げつつ、革命を急進化させ、あたり限り前進しようとする事はついに権力の獲得までいたる事はできなかつたからである。^(註)

② 永久革命論は、トロツキーに結びつけられて理解されているが、ここでは、一応マルクスに於けるそれを検討したのみでトロツキーのそれは、ワケ外である。ただし、恐らく、トロツキーの組織論上の弱点は、その永久革命論と無関係でないと思われるが、ここでは保留しておく。ドイツチャー著

このような、オニインタールの立場は、カウツキーの「権力の道」に於いて体系的に展開されている。

カウツキーは、その著作の中で、資本主義の発展そのものが労働者階級の数的増加をもたらす「国民中の革命的分子の優越をいよいよ大きく形成するようにと作用している。」し「権力への道」世界大思想全集 二二五頁）だが、それは「さし当つて可能性において革命的であるにすぎない。」（同 二二五頁）として、かかる労働者の権力への道は「まずオニインタールに……多くの社会改良すなわち労働者保護に向けられる」（同 二二五〇頁）そして、それは「労働組合方式の大斗争によつて準備され強要され」逆にかかる斗争は、資本家の反撃によつて政治斗争とへ発展してゆき「このようにして、政治生活においては政治的諸権利をめぐる斗争が前面にあらわれる」（同 二二五〇頁）そして社会民主党は、かかる大衆を指導し多数を獲得して権力へ（ローザ「ロシア革命論」と進まねばならない—これがカウツキーのおよその見解であった。

そして、この立場は、カウツキーも述べているように（「権力への道」序文）レーニン、トロツキー、コーザも承認した道でもあつた。だが、これは、トロツキーが「過渡的綱領」で述べているように、まさにオニインタールは、革命を日程のぼしていなかつたからである。それは、帝国主義段階への過渡期としてのバリコミニオンから一九〇五年オニインタール革命の時代に照応している。まさに、現代革命は、永久革命—オニインタールへと発展した、革命思想 組織の発展、組合、いわば否定の否定でなければ

「武装された千言者トロツキー」を一読されたい。

ここで提起されたプロレタリアの独自性 規律性、組織性、前記党の問題は、国際労働者協会（オニインタール）の設立として試みられたが、マルクス、エンゲルス、就中、マルクスは、それを完成する事はできなかった。それには歴史は十分成熟していなかつたのである。バリ・コミニオンは、かかる過渡期の斗争であつた。

ここに提起された問題は、更にエンゲルスの指導のもとに、ドイツ社会民主党とオニインタールとして組織化されていつた。エンゲルスの「フランスの階級斗争」への有名な序文は、明白に、永久革命の放棄を語ると共に、日程に寄りつつある現代革命の問題性を示唆している。彼は、普通選挙の有効な利用によつて國家機關に進出し、逆にそれと戦う事がからとなると説き「ブルジョアジーおよび、政府は労働者党の非法活動よりも合法活動のほうを遙かに怖れ、叛乱のなりゆきよりも選挙のなりゆきのほうを遙かに怖れるといつたしまつたにたつてきた」と述べ、そして、それに就いて、軍事情術の発達によつて、もはやバリエード戦によつては、支配者に打ち勝てないとしたのであつた。しかし、これは過渡期の産物であつた。^(註)

③ かかるエンゲルスの言葉に対して、一方では老エンゲルスは日和見主義になりつつあつたという批判と、他方では、構造改革派によつて、構造改革の萌芽といつた とりあげ方がなされているが、それは、いづれも時代的影響を抜きにした訓話学的解釈にすぎない。

ならなかつた。^(註) オニインタールのコースによつても、単純な永久革命への逆もどりによつても問題は解決し得ないのである。この否定は組織的にはレーテによつてのみ実現された 得るであろう。更に、この小話は、この事をドイツ革命の山から論証しようとする事にその目的がある。

以上、やや長々と述べたが、我々は革命思想史を一般的に語るうというのではなく、まさに現代革命の問題を、かかる脈路に於いてつかんでおくことが必要であると考えたからに外ならない。

④ 先走つて云つておけば、ローザは、かかる現代革命が日程に導つた姿を見て取つていた。一九〇五年のロシア革命を契機に、「マッセンストライキ、党および労働組合」が叫ばれた事は、その事を象徴的に物語る。だが今や、成立したレーテの運命が、どのような経路をたどつたかを見る事によつて、検討しなければならぬ。

(4) 「レーテ」の空洞化と革命の挫折

先に述べたように、一月九、一〇日の段階では、國家権力は、形式上レーテに移行した。だが、その内容は、圧倒的にSPDのものであつた。

ところで、このレーテ成立以前の支配層を構成していた資本家カイゼルトウム（軍隊、官僚）の動向はいかなるものだったの

資本家は、すでに一九一八年、戦争の敗北と、大衆の革命化を見こして方針を検討していた。そして彼等は、現在のカイゼルを支持し大衆と戦う事はできないと考えその同盟者を労働組合に求めるにいたつた。かようにして革命前の一月二日には産業団体の代表と労働組合が会合し、協働体の設備が同意されるにいたつていた。革命後、資本家は、労働共同体としてそれを早急に実現し、八時間労働制等広範な諸権利を労働組合側に許容したのであつた。更に、ブルジョアジーにとつて労働組合 S P D は、彼等の延命のための最後の手段であつた。これに反してロシアのブルジョアジーにとつては事態は異なつたものであつた。ロシアに於いてもフアーリは二月革命に於いて、何の抵抗もなく、くされきつた死体のように崩れ去つた、その時点まではドイツとかわらない。だが、彼等は、結局ドイツブルジョアジーが見出し得た労働組合という同盟者を見出す事はできなかったのである。

それでは軍隊はどうであつたらう。この軍隊は、ほぼ三つに分かれる、オーハカイゼルを頭にいただきヒンデンブルグ・グレーナに引きいられた特権団であり、おおむねエンカールの出身として反動的であつた。そして彼等は、革命運動のおおりで解体しつゝあつたといへ、運動にふれる軍の少なかつた前戦部隊を掌握しベルリンに帰る軍によつて革命を弾圧しようという意図を持つていた。この前戦部隊がオ二のものである、しかし、国内の守備隊は兵士協議会を放棄して、これとは異なつた動きをしていた。いずれにしろ、参謀本部は、革命運動をより恐れる S P D にかくまれる事によつて存在し得ていた。ここでも又 S P D の存在こそ

國家、軍軍機構は、その活動をつづける。ただし、それらの行政機構は、労働協議会からの委任により指令を発するものとする」と。だが、すでに一月二日、この権限は行政権は人民委員協議会にあることとなつた。そして更に、二月九日にいたつて人民委員協議会は、革命によつてつくられた國家秩序を防衛することゝ

は人民委員協議会に移つたのであつた。「労働協議会執行協議会が政治の場から締めだされ、もはや権力もなく、なんらの重要性ももたなくなつた」(ローザ選集四、一〇〇頁)とローザはローテ・フアーネで述べるにいたつた。

この間、スバルタクスは、一月一日に指導部を選出し、活動にのりだした。「権力のすべてを、はたらく人民大衆の手に、労働者兵士評議会の手に！たえずすきをうかがっている敵に對して革命の成果をまもれ！」(ローザ選集四、六〇頁・ローテ・フアーネ一月一八日)だが、もちろん、ローザは、現実の革命の進行が、いまだ権力奪取にまでいたつていないことを冷静に見ていた。「労働者兵士政權は破壊した帝國主義政權の代理人としての機能を果たしているにすぎない」そして「ドイツ革命のこの有様は、ドイツ国内の諸階段の進展の度合にそのまま見合つているのである」(同、六二頁)だが、いつたん歩みはじめた革命は「一歩一歩、疾風怒濤をついて闘争と苦悩と窮迫と勝利のなかを目的に向つて進んでゆくであらう」(同、六三頁)

しかし、スバルタクスのかかる活動と主張にもかかわらず、その勢力は微々たるものであつた。就中、革命の中核となるべき基幹部分に影響力を拡大し得ず、むしろ労働意欲を喪失した労働者

は、エンカー特校団の存在を許した決定的な要因であつた。まさにプロレタリアートは、かかる社会民主党を徹底的に暴露し斗争する事によつて敵を團結させ、ブルジョアジーの放逐とエンカー特校団のにぎる暴力撲滅との軍事的斗争に發展させることによつてのみ勝利への道は存在していたのである。

さて以上のように反革命側は、S P D を党として結束していたが、それでは労働者階級の斗争は、これに對して、どのような發展をとげたのであろうか。それは、ほぼ、三つの時期に區別できる。

オ二期 一九一八年一月九日―二月六日

オ三期 二月六日―二月二四日

オ三期 二月二四日、一九一九年一月四日―一月十五日

ローザの云う通り、大きく一―一八―一二―一四 一二―一四―一五とわける事もできる。(選集四「綱領について」なお、この間については、特に、ローザ、スバルタクスの動向に注目し、その敗北の過程を見てゆく。

オ一期 この間には、これといった斗争は存在せず、それ故、各組織にとつては大衆を教育し自己の組織を打ちかためる期間であつた。

だが、この間にも、先に述べた革命運動の二つのコースを組織的に表現する人民委員協議会と執行協議会(ローテ)との関係では、除々に、ローテを骨抜きにし、人民委員協議会に権限が吸収されつゝあつた。一日のベルリン協議会の翌日、執行協議会は次のような告示オ一号を出した。「すべての地方自治体、地方、

や、激動の中で熱狂した小ブルを多くかかえこむ事になり、ローザ自身の手をしばる事にさへなつた。しかも、スバルタクスのかかる傾向は、斗争の中で左傾化し共通のローテ独裁を主張していたオプロイテさへも獲得する事に失敗したのである。

オ二期

二月六日、右翼によるローテ執行協議会員逮捕未遂事件、更に、スバルタクス団のデモに對する近衛騎兵の衝突事件が起り、デモの側に致一〇名の犠牲者を出すという事件が起きた。これをきっかけに、S P D、U S P D、スバルタクスの対立は一層深刻化するにいたつた。だがこの対立は、二月一六日からして予定されている全国労働協議会をひかえて、いまだ軍事的衝突にまでは発展しなかつた。

この間の大衆の状況は、例えば、一六日を前にして開かれたベルリン S P D 大会で、国民会議を主張するハーゼ案がローテ独裁を主張するローザ案を四八五：一九五の比で破つた型にも表現される通り、部分的な急進派はあつたにしろ、多くの大衆の急進派が進行したわけではなかつたし、まして、これが急進的なベルリンなのであつたから全體的には、いまだ革命への盛り上がりは整へ移行するような段階ではなかつた。

スバルタクスは革命の骨抜きの進行の中で一六日の全国労働協議会に期待したが、事態がそのようであつてみれば、敗北は明らかであつた。はたせるかな、全国労働協議会は、全代議員四八八名中 S P D 二八九、U S P D 九〇(うちスバルタクス一〇)という比率の中で、一九日三四四：九八という大差で、労働協議会

はなく普通選挙による憲法制定会議をもつてドイツの統治形態とする事を決定し、自から自身をほむり去つたのである。この大会で中央協議会が設けられたがU S P Dは参加しなかつた。

このようにしてS P Dのヘチモニーのもとに対立に激化し、一月二四日の「血のクリスマス事件」は、より一方対立をまねりたてた。それは一月斗争の序曲をなしている。

ベルリンに在留していた人民海兵隊といわれる一隊は、一月二六日の事件以後、S P Dと対立するにいたり、S P DとU S P Dとの対立の深化の中でU S P Dへと傾斜していた。

そしてS P Dは、この部隊を解散すべく努力していたが、二四日給料の支払を政府が拒否した事から事態は深刻化し、人民海兵隊は、ウエルストラ軍司令部の幹部を監禁するにいたつた。エーベルトは、参謀本部に依頼し、前戦部隊によつてこれを弾圧せんとし、ここに戦争は開始されたが、海兵隊に不利であつた。しかし、この戦争を聞いてかけつけてスバルタス指導下のデモが政府軍の背後にせまると、それは戦いを放棄し戦いは完全に逆転した。

この事件は、S P D参謀本部に深刻な波紋を投げずにはおかなかつた。ただし、彼等は、前戦部隊の使用によつて革命を粉砕しようと考えていたからであり、その才一戦に無様な敗北を喫したからである。そして、又この斗争は、革命を一顧前へかりたてると共に、同時に大衆の内部に深刻な分裂を引き起し、例えば、二四日のこの事件の犠牲者の葬儀にあつて二つの部分に分化するにいたつた。

エーベルトは、自己の地位の不安定さを思い知らされ、政府を

ベルリンから移転することさえ考え、かつ参謀本部に一層の依存

を深めたのである。そして、この事はU S P Dを最終的にS P Dと決裂せしめ二九日人民委員協議会からU S P Dは引上げるにいたつた。しかし、U S P Dの右派はもとより、オプロイテに代表される左派もスバルタスと統一する事はなく、ここに、スバルタスは、ブレーメン左派(ラディクラ)と共に、一月三〇日ドイツ共産党を結成するにいたつた。事態は急を上げていた。しかし、コーザは、この共産党の創立大会に於いて革命の中間懸括とも云うべき演説を行い事態の進展を正確にみつめていた。

「 たち、一月九日から最近の日々に至るこの才一段階は、あらゆる面にあらわれた幻想によつて特徴づけられる」(選集「綱領について」一四一頁) この幻想とは、要するに社会主義の旗のもとでの団結という幻想であつた。だが才二段階に入つたら、かかる幻想は破れ、それぞれの立場は明確化されつつある。それでは才二段階はどのような内容として展開されるのか。

「その時期(才一段階——八木説)には、革命が、まだ政治革命以外のなものでもなかつた。…経済的な領域にある革命の主要な課題——経済的諸関係の変革には、まだ手が届かなかつた」(同 一四四頁)

「けつきよく、革命の才二段階では、ストライキが、しだいに拡大するだけではなく、革命の中心に革命を左右する地点に立つこととなつて、たんに政治的なだけの問題をわきへおしのけることになるだろう。そこで当然、経済斗争の局面はものすごく災難の度を加える」(同 一四九頁) このようにローザは、危機の深化

によつて才一段階の政治斗争から、才二段階の経済斗争に重点が移ることによつて、「いたるところで、労働者兵士評議会の手中に収める事によつて、ブルジョア国家を壁辺から土台から掘りくずしてしまわねばならない」(同 一五七頁)と結論したのである。

④ ローザのかかる考えを「経済主義」としてその弱点として考える人々がいるが私は、遂に、この点をローザが現代革命の性格をきわめて明瞭につかんでいたのであると考へている。この点については最後に検討する。

しかし、このようにして生まれた若いドイツ共産党は、その直後に、もう強いうれた決戦に出会わねばならなかつた。しかも、その方針も、ローザの懸望に於いてではなく、熱狂した下部におされてきわめて組織性のないままにあつた。一月斗争がそれである。

一月斗争は、先に述べた人で海兵隊事件とS P D、U S P Dの対立の激化の延長線上に、一月四日、ベルリン警視總監アイヒホルンを政府が罷免した事に端を発している。このころ、ベルリンには、人民海兵隊の他に共利団兵士隊といわれる警備隊が存在していたが、これも志氣上がらなかつたと云われている。更に、前戦部隊も存在していたが、クリスマス前の端郷によつて市街戦に使甲しうるのは千名足らずに減少していた。かかる中でU S P Dに属すアイヒホルンに率いられた保安隊は政府にとつて無意味な存在だつたのである。

このアイヒホルンの罷免は、すでに激化していたS P Dと革命派の対立を一挙に大衆の前に明らかにし、四日、オプロイテは、この報に接するや直ちに激をよばして五日のデモを提起し、共産党も殆ど同じくデモを呼びかけたのである。

この段階で共産党は、先のローザの論で、いまだ政府打倒を目標にするのではなく防衛戦であるとの見解を持っていた。

だが、翌五日のデモは指導部の予想をこえて大規模なものとなつた。大衆は、警視庁の前に集まり、アイヒホルン、リーブクネセトらは激しい政府弾劾の演説をした。だが、指導部は「協賛に臨議と」するのみで、明確な方針を大衆の前に提起しなかつた。のみならず、デモ終了後の会議(オプロイテ、共産党からリーブクネヒト、ビーク)では、はじめ自らの行動に対する責任感が鈍く、熱狂し、没落しゆく小平を主体としたフライコール(義勇軍)をも政府は組織していた。

六日のデモも大規模であつたが、同時にS P Dを支持する大衆も旧宰相官邸に集まり政府を擁護する態勢を示し、深刻な対立を示した。かかる中で、軍隊は、中立を宣言していたが政府の工作が進むにつれてベルリン守備隊はS P Dにかたむきはしめた。更に、熱狂し、没落しゆく小平を主体としたフライコール(義勇軍)をも政府は組織していた。

しかし、かかる、軍隊は、むしろ、労働者階級の斗争によつて初めて革命の側に加担するものとすれば、まさに問題は、労働者階級の指導部の行動にあつた。恐らく、指導部の確固とした方針

があつたならば、少なくとも一たんベルリンは革命の輻に落ちたであろうと云われている。

すでにRSPD右派は六日から調停にのりだしたが、政府側の断固とした制圧の意志のため不調であつた。更に、九日、A・B・C等の大工場の数千の労働者は参合し労働者同志の殺戦に終止符を立つたために調停に乗り出したが、これも失敗した。そのような中で、革命派は、明確な方針を出し得ないままに、事態におさまれて行動するのみであつた。ローザは、頭初、政府打倒に反対していたが一たん開始された以上、それはそれ自体の論理で進む事を見取つて徹底的な斗争を行う事は「革命の名譽」のために必要であると考えていた。彼女は指導部の無能に対し、「行動を！行動を！勇敢に、断固として、徹底的に行進すること——これこそ革命的オプロイテ、ならびに誠實な社会主義指導者たちの絶対の義務であり、責任である。反革命を武装解除し、大衆を武装して、権力の陣地のすべてを占領せねばならない。迅速に行進を！」

(選集四、一六四頁、ローテ・ファアネ一月七日)

九日、ゼネスト宣言に従つて再び大デモが催されたが、すでに労働者の中に流血の中止を呼び、政府と同時に革命派に對しても非難の声が上つていた。このような大工場に於ける労働者階級を革命の側に獲得できなかった事、これは指導部の逡巡の結果であると共に、それにいたる過程の問題でもあつた。

政府は、この中でフライコールでもつて、弾圧し、ついに一日、オプロイテは、労働者にゼネストの中止と就労をうながすにいたつた。指導部の方向のなさは、ますます所なく暴露された。

(5) 現代革命の条件

以上のように、現代革命は、その悲劇的な幕を開けることになつた。我々は、このドイツ革命の敗退の過程から、その問題を理論的に検討しなければならない。

まず、この一月斗争の過程は、その指導部の若さを強く印象づけた。そして、それは、ローザの組織論の弱点と関連させて語られている。(註)

① その点については、ルカーチ「組織論」に、ほぼ完全に展開されている。

レーニンも、「ドイツ労働者は、あまりにおそく行われた分離のために、墮落した(シャリデマン、レーギン、デグイド等々)、無性格な(カウツキー、ヒルファディング)資本の従僕との々統一々というにくむべき伝統のために危機の瞬間においななお真に革命的な党をもたなかつた」(「ドイツ共産党員への手紙」全集三二)と述べている。

しかし、もちろん、レーニンの提起は、分離が行われていいいといつた単純な問題ではない。何故なら分離の行われていたヒットラーとの斗争で、ドイツ共産党は再び完全な敗北——それは、もはや党の若さのせいではない——を経験するのだから。

いつたんオプインターによつて分離された共産党は、三、四回大会で、統一戦線を出してしたが、ヒットラーに對する敗北は、この正しい適用を過まり社会ファシズム論のせいであるといわれている。確かに、それはその通りであろうが、その時又、一

しかし、それは、この段階での技術的手段ではいかんともしがたものであつた。まさに「あまりにもおそすぎた分離」の結果であつた。ローザは、その組織論の弱点を気づかないわけにはゆかなかつた。「大衆の革命的エネルギーを結集することそして大衆の斗争を指導するにふさわしい機關を作りだすこと——これが、つぎの時期の焦眉の課題である。」(同 一七四頁、ローテ・ファアネ一月一日)と彼女は初めて指導部の重要性を痛感して書いたのである。

彼女は、この斗争の総括を行い、次の展望——経済斗争の激化と大衆の革命化——を明らかにしつつあった。「ベルリンの秩序は維持されている！ほごくがよい、鈍感な権力の手先どもよ！おまえたちの『秩序』は沙の上の樓閣だ。あすにも革命は『物』の眞の音をどろかせてふたたび立ちあがり、トランベットを吹きながらして、おまえたちの驚愕をしりぬに、こう告げるだろう

Th war, ihr Ein, ihr warden sein!

(われは、かつてあり、いまも在り、こんごも在る！)

(同、一八七頁、ローテ・ファアネ一月四日)だが、彼女は、スバルタクスを強固にきたえなおすだけの時間を持つ事はできなかった。

この翌日、ローザとリーブリネヒトは、フライコールの手で殺され、ドイツ革命の遺産と行を共にしたのである。

月斗争と同じように圧倒的な基幹部分の労働者が、SPDのもとに中立を持して動かなくなつた点を考えるならば危険に於ける統一前戦術の正しい駆使のみならず、それにいたるまでに、この部分などをどのようにして獲得するかという点に問題は存在していると思われる。我々は、そのような部分を獲得しうる機能を保持するためにこそ、おそすぎた分離を云々しなければならぬのである。

さて、(3)で述べておいた。革命思想組織の発展の中で、現代革命の間題は、どのように展開されねばならないのであろうか、主としてローザにそくして検討してみよう。

一月斗争に於ける敗北は、結局、ローザに大衆のエネルギーを吸収する事によつて資本主義を「底辺から」ゆすぶり倒そうとする当初の方針が事態の進行によつて放棄され時機尚早に街頭へ出て決戦へ進んだ点であつた。

しかし、かかる街頭行動も、恐らくブルジョア革命又は永久革命の段階(一八四八年まで)では、唯一の斗争形態だつたのである。その段階では、革命的情勢の中で、斗争を激化し、パリケードをきき、その事によつて政治権力を粉砕すればよかつたのだ。確かにブルジョア革命と永久革命とは後者はプロレタリアートが斗争のヘゲモニーを握っている点で異なっているが、その斗争の形態は、変化してはいないのである。これは、パリケード革命とても名づけられるものである。(註)

② グラムシのいう機中戦とは、このことをさしていると思われる「新君主論」

しかし、歴史の弁証法は、かかるバリケード型革命へ打つて出た
スパルタクスをもの見事にしりどけてしまった。

だが、もちろん、このようなバリケード戦が現代革命に不要な
ものになつた等と考えるのは、バカなオシヤベリであろう。コン
ア革命に於いても結局は蜂起こそが事態に決着をつけたし、ドイ
ツ革命に於いても、一たんレーテに吸収されたエネルギーは、再
び、蜂起の問題を必然的に提起する段階へ深化したであろう。問
題は、どのような準備と過程を通じて、機軸戦に移るかという点
にある。^(註)

^(註) 諸君の諸君に一言しておかねばならないが、グラムシは、
決してその陣地戦によつて平和革命や議會の多数獲得を云々
したわけではない。例えば、彼が、力関係の二三のモメント
として軍事的、政治的、又は政治的、軍事的のモメントに言及
している点からも明白である。

又、人民戦線との関連では、それを一種のポナバルチズム
それは特定の情勢、すなわち二つの勢力がたたかいていて
て、どちらも、独自の分野で独自の再建の意表を表明する能
力をもつていないような情勢に結びついている」(選集一、
一七一頁)と見ていたらしいが、ここで検討は出来ない。

ドイツ革命の敗北は、まさに、労働者の多数を獲得する以前に
決戦に出た事によつており、しかもこの多数獲得は、確かに革命
的情勢の中で革命的戦術を通じて最もよくなし得るのであるが、
スパルタクスにとつては革命情勢の訪れる前に、ある一定の大

それに対して、ドイツに於いては、カイゼルトウムの存在が
あつたといえ、まがりなりにも政治的自由は獲得されていたし、
経済斗争は、労働組合の指導のもとに容認され、ロシアのように
ストリートに政治斗争へ発展する事もまして蜂起への傾向もあつ
たとはいえない。従つて、そこでは、労働者階級を改良斗争を通
じて教育する有利な条件が形成されていたが、同時に、この容認
された政治的自由ブルジョア民主主義と経済斗争が体制内に封
じこめられる事によつて、容易にブルジョアジーと、その政治権
力に対する敵対的意識階級意識は形成されなかつた。しかも、
かかる事態は、何にもまして、労働組合の職業化、官僚化、その
比重の増大による社会民主党の変質をもたらす事となり、労働者
階級は、いわば二重の鎖に呻吟せねばならなかつた。しかも、か
かる労働組合は閉鎖の進行した甚重部分の労働者階級こそが中心
となり、彼等の階級意識の荒廃をまねいたのである。かかる
平時に於ける労働者階級の状況は、革命的情勢の到来にもかかわ
らず、トロツキー云うところの「上部構造の慣性」によつて客観
情勢においつく事ができず、その内的な危殆をもたらすのであつ
た。それ故、問題は、まさに平時に於ける改良斗争を通じて、労働
者階級をどのように組織化するにかかっていたのである。この
問題を我々は検討しなければならぬが、そのためには、何故、
かかる労働者階級の分裂、体制内化が行われたかを見ておかねば
ならない。

その問題は、レーニンの規定に従つて、帝國主義段階に於ける
超過利潤による労働者の買収、労働貴族の発生として理解されて

衆を甚重産業に於いて籠固として組織できなかった点が、いかに
ハンデイとなつたかは、すでに見た通りである。

この点は、例えば、ロシア革命に較べてみればきわめて明らか
である。ロシアに於いては、主要都市のプロレタリアートの中に
ボリシエウイキは籠固とした組織を有していた。だが、どのよう
にして工場の中で影響力を拡大するかという点では両者は異なつ
た条件にあつた。ロシアに於ける経済斗争は、絶対主義の存在の
故に、ただちに政治斗争へと転化し、しかも、そのような斗争は
不可避的に蜂起へ発展するという法則性を有していた。^(註)

^(註) この点については、レーニン全集一八巻「経済ストライキ
と政治ストライキ」、革命的昂揚の巻、反革命から運動が
回復する過程でのレーニンの諸論文を参照されたい。「頑強一
な大衆ストライキは、わが國では武装蜂起と不可分に結びつ
いている」(レーニン全集一八「革命的昂揚」一〇三頁)

従つて、ここでは、絶対主義に対する敵対意識、それこそが宣伝、
煽動の内容であつた。政治的自由を獲得することも、経済的改良
を勝取る事も異常なまでに困難であつたそこで一切は、ソア
リの打倒が問題であつた。^(註)

^(註) 「ロシアの生活におけるこの全般の無権利状態、個々の
権利の獲得のための闘争を行う希望も可能性もないこと、ツ
アリーの君主制とその全体制が改善しがたいものであること
これらのことがレナ事件からあきらかになつたからこそ、
大衆は革命の炎を燃えあがらせたのである」(レーニン全集
一八、一一〇頁「革命的昂揚」)

いる。確かに、それは正しいのであるが、問題は、そのみに
とどまらず、まさに産業資本主義段階から独占資本が成立するに
いたつた直接的生産過程の変化という点を見落すならば、それは
まったく不十分であろう。この事は、高度資本主義共通の現象で
あるが、ここでは、後に述べるソブ・スチユアート運動を関連
させるためにイギリスに於いて、コンビネーションを中心とする
生産過程の変化が、どのように労働運動に作用したかを見ておこ
う。

イギリスに於ける労働組合運動は、オーエンの思想に影響され
た大連合の崩壊の後、いわゆる新型組合が確立される。これは、
不熟練労働者を排除した熟練者によるものであり、それは、一八
五〇年一七〇年の間、世界の工場としてのイギリスに於ける産業
資本主義段階の最終段階に見合うものであつた。

だが、かかる組合は、独占資本の成立、それは、まさにコン
ビネーションを中心とする生産過程の変化を軸としている。こ
よつて危殆におちいつた。従来熟練工は不要となり、ここに、
労働組合は、不熟練労働者に対しても門戸開放し、産業別労働組
合が成立しはじめた。ところで、従来新型組合は、その組織の
中核を工場におくのではなく地域におき、高額の組合費による相
互扶助的の意味ではクラブ的なものであつたが、独占の成立と
共に発生した産業別組合は、一方で団体交渉権を中央集権化する
と共に、他方で、強固になつた資本の職場支配に対して買金のみ
ならず他の労働諸条件を防衛するための工場に於ける活動が要請
され、いた。しかし、この事は、きわめて困難をきわめた、とい

うのは、生産過程の高度化によつて、労働者はますます、思うままに資本の脚につなわれ、それを現実的に保証する新しい労務管理体制がしかれたからであり、しかも、レーニンの周知の規定のように独占利潤による上層労働者の買収が行われ、更に又、かかる生産過程の変化に共なる都市中間層の発生とピスロークラスーの強化。といった、大衆社会論者のような如き事情が生じたからであつた。

このようにして、生産過程の変化は、労働運動にも根本的な変化を与えたのであつた。資本の職場に於ける支配は、労働組合によつて、いわば補完される事によつて完成した。しかも、かかる段階で、経済的改良斗争を抜きにして一般的な政治的な活動は事実上不可能であるか、ないしは、単に街頭化するのみで、国家の根幹をなす工場に於ける資本の支配は貫徹するという結果を招いた。かといつて、即成の労働組合と妥協するならば、ドイツSPDがあゆんだように完全なブルジョアの代理人となる以外はなかつたのである。

これらの事實は、革命的情勢に、明らかに表現される。先に述べたように、ドイツに於ける革命の才一段階は、カイゼルトウームの打倒 政治的自由の獲得を以つて開始された。これはロシアに於いても又同様であつた。しかし、ドイツに於いて、それ以降（一月九日以降）大衆の右傾化がすでに現われた。しかもドイツブルジョアジーは、いわば国家権力なしにやつてゆけるという事情が生じたのだ。即ち、いわゆる労働共同体を創出する事によつて、権力の強制を借りる事なく、労働者の同意を勝ち取り工

シカリズム——これらは偶然ではなく、独占資本主義段階で生じた、日和見主義のもう一つの形態である。

このようにして、個別資本との敵対は、国家権力を改良すれば解決する如き幻想が生じたのである。このような幻想を打破るためには、工場に於ける権利の拡大（経済斗争）を徹底させ、その事によつて国家権力との衝突へと発展し、個別資本との国家権力との同一性が認識されねばならない。だからこそ前に先走つて述べておいたように、ローザが、革命の才二段階はストライキによる経済斗争であるとしたのは、経済主義などではなく、現代革命の法則としてまったく正しいのである。

更にこのように、ブルジョアジーが、国家権力の動揺にもかかわらず、市民社会に於いて再生産を行いうるという事情が生じたからこそ、まさに、現代革命は、工場に於ける労働者の組織、レーテを基底にしてしか達成し得ないのである。かかる形態に於ける現代革命が、日程にのぼつた事は、すでに才一次ロシア革命によつて明白であつた。

ローザは、それ故、永久革命型とも、才二インター型とも異なつた、大衆ストライキこそが、中軸となる革命について論じたのであつた。ローザは、「ところで、ロシア革命が以上の論拠（マルクス・エンゲルスによつて云われたプロレタリアートがすでに十分に強力な組織をもっているならば、もはやゼネストなど必要としない」という考え——八木沢）に根本的な修正を加えるにいたつた。ロシア革命は、階級斗争の歴史のなかで、はじめて大衆ストライキの觀念や、さらにゼネストの觀念を現実にはなばな

場の秩序を保ち得たのである。彼等は、いわば、国家権力とは無関係である。それが、どのようなうと自分達には関係ない。我々は、ただ、工場の秩序さえあればよい」と言明し得たのである。このようにして、彼等は、労働者階級内部の分裂を利用し、その上層部分と同盟する事によつて、その上層部分を国家権力に送りこむ事によつて事態を収束し得た。この事を逆に労働者階級の側から見れば、彼等は、国家権力を支えているのが、とり

もなおさず、自分達の工場の秩序を中軸とする市民社会に於ける活動であることを理解し得なかつた事を意味している。しかし、そんなつた理由も、ドイツのひいては高度資本主義国家内部にあるのだ。つまり、先に述べたように、ロシアに於いては、経済斗争（個別資本に対する斗争）も、必然的に、国家権力の介入をまねき「蜂起と結合」（レーニン）していた。それ故、ここでは、個別資本への敵対意識は、国家権力への敵対意識と不可分であつたのに対し、ドイツに於いては、経済的改良斗争は、容易に国家権力との衝突へ深化せず、個別資本内部で解決され、ただ、経済的改良を獲得するために国家に立法を要求する（いわゆる組合意識に接ぎ木された限りでの政治）ためにSPDの議会に於ける得票をふやすにすぎないという結果をもたらした。^(註)

かかる、上層労働者に対する反発として、いわば、その分身としてサンジカリズムが叫ばれる。ドイツに於いては青年派、フランスに於いては、フルレに思想的代弁者をみいだすそれ、イタリアに於いても一九一〇年代のサンジカリズム、日本に於いても民本主義に對立する、大杉のアナルコ・サン

しく突らせ、労働運動の発展に新紀元をひらいた」（ローザ選集二、一七四頁「大衆ストライキ、党および労働組合」）と述べる時、この事は明らかである。

だが、このようにして現代革命が日程にのぼつた事、それが、大衆ストライキを軸として発展するという事を確認する時、しかも、ローザが「党は、大衆ストライキの技術的準備をするのではなく政治的指導を行わねばならない」と云う時、それは、相互に関連する二つの点が不明確である事を逆に明らかにする。才一は、周知のように、党組織論の欠如という事である。^(註) 才二は、かかる大衆ストライキが、どのように権力奪取と関連しているかという点である。

③ この点は、すでに多くの人によつて云いつくされているので検討を省略する。ルカーチ「組織論」参照。

才二の点で、ローザは「大衆ストライキは、政治斗争に對立するものではなく、政治斗争におけるひとつの武器として運用されるべきものであり、また一挙に社会主義体制への移行をなすとげる奇跡的手段ではなく、現代の階級国家において、最も基本的ないくつかの自由を獲得するための、階級斗争の一段として運用されねばならない」（選集四、六三頁）と述べているが、これは正しいとしても、それ以降の発展の形態としてのソグワイエトと武装蜂起についてはふれていない。事実、彼女は、一九一八年に書いた「ロシア革命論」においてさえ、ソグワイエトと憲法制定議會を調和させようとし、後者を解約したボリシエウイキを批判している（選集四「ロシア革命論」二四八—二五二頁）。レーテ独裁を

結論するのはドイツ革命における実践の帰結としてであった。
更に又、このような、党、レーテに対するあいまいな見解は、革命的情勢にいたる過程で、いかに大衆ストライキ↓ソヴイエト蜂起を準備するかという点の、周知の自然発生性理論による、欠如とも関連している。一月斗争の過程で悲劇的な形で現われるのである。

レーニンが云つた「おそすぎた分離」と共に、そのように分離した組織が大衆ストライキとレーテを準備するために、一方に於いて、政治的な宣伝、扇動活動と共に、組織的には、工場に於ける権力の拡大による労働者への影響力が必要であつた。この点でも確かに「改良は革命の産物」であるといわれるのも事實であるとしても、特に高度資本主義国に於いては、改良斗争が容易には権力との衝突をもたらさない以上、この改良斗争を、どのように位置づけるかは、きわめて重要であるといわねばならない。ローザは、すでに修正主義との論争に於いて「社会改良のための斗争は社会民主党の手段であり社会革命はその目的であるから、社会民主党にとつて社会改良と社会革命は不可分の関係にあるのだ。」(選集一、「社会改良か革命か」一五四頁)と述べているが、改良斗争は、どのような形で工場に於ける権力の拡大をもたらすのであるうか。かかる、工場に於ける影響力なしには、それは、スパルタクスのように、いたずらに街頭斗争にエネルギーを放出させるのみで、レーテに大衆のエネルギーを吸収し、「ブルジョア社会の底辺」から掘りくずす事はできないのである。

しかも、このような工場に於ける権力の拡大が、いかに独占資本
工場での権利拡大、革命情勢に於ける、大衆ストライキから、レーテへと必然的に発展するのである。一方に於ける、改良のつみ上げでは、革命へは決していたらないし、他方、改良斗争を通じる工場に於ける権力の拡大を抜きにしては、単なる、官僚団体となるか(ヒットラー登場時のドイツ共産党)又は街頭化して権力に粉砕されるか(スパルタクス)のいづれかである。

一九一八年一月九日から一九一九年一月一日にいたるドイツ革命の流産は、現代革命の典型的な姿を示した。クに、くむべき統一の伝統(レーニン)は、労働者の真の統一へ転化しなかつた。

ローザ・ルクセンブルグは、現代革命が日程にのぼつた罪を理解したが、にくむべき統一を成ることをしなかつた。それを破つた時、スパルタクスは、被女の尊に反して、いわば永久革命型に逆もどりする事によつて権力に粉砕され、ドイツ革命の流産と共に、被女の死体は、ランドウエア運河に流されたのである。

本主義段階で困難になつたかは先に見た通りである。しかし、我々は、かかる困難の中で、工場に於ける権利拡大からゼネストへと発展していつた例を、イギリスに於ける、シヨップスチユアートル少数派運動による一九二六年の革命情勢に見て取る事ができる。

先に述べたように、イギリスの組合は、産業資本主義の段階で、まず地域に結成されたが、独占資本の成立と共に、単なる賃金問題だけではなく、職場に於ける種々の労働条件が問題とされ、従来の地域的クラブの組織では機能を果たせなくなつた。そこで、労働者は、職場に於いて、代表(シヨップスチユアートル)を選出し、かかる職場の要求を改み上げる機能を与えたのである。このようにして発生したスチユアートルと組合との関係は、ある時は、組合を強化するための補完的機能を果たすと共に、組合が、官僚化し中央集権的な質上げ交渉のみ専心するといつた時には、これと敵対しなければならなかつた。

このようなシヨップスチユアートルの運動は特に、大戦後「少数派運動」として展開され合理化攻勢の中で地歩を固め、ついに二六年のあのゼネストへと発展していつたのである。これは一種の戦斗的才二組合とも云うべき、官僚化した組合に敵対し、工場に密着した活動家組織によつて指導されたのであつた。

このように、現代革命は、永久革命論の提起した、ダイナミックな戦術による運動の急進化シヤコパン主義、才二インタールの提起したプロレタリアートの独自性組織戦、の統合として、分離された党による政治的な宣伝、扇動と共に「改良斗争」による

